

インドにおける宗教的暴力

—ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒に関連して—

K.V.バーブー

翻訳：三澤 祐嗣

【要約】

今日の世界において、宗教と暴力は、密接に関連した現象としてしばしば見られる。多くの宗教は、内在的に暴力的なものとして決めつけられ、そして、西洋、すなわち、世俗主義化された国々は、多くの非西洋の国々における宗教と政治の緊密な関係を、暴力的な過激主義の温床としてしばしば避難する。多くの研究は、過激派の暴力、戦争、そして暴動における宗教の役割について行われてきており、この原稿においてもさらに議論される。しかしながら、暴力の終焉をもたらしたり、和解に導く際の宗教の役割にはほとんど注意が払われていない。私の見解では、宗教の相反する性質を十分に理解するために、それらの両方を調査することが重要である。宗教は、暴力と平和の両方を促すことができ、（実際に）促してきた両刃（もろ刃）の剣として表現される。

現代において、人類は剣の刃の上で生きている。なぜなら、社会あるいは国のいたるところですんで傷つけ、侮辱し、常に他者に対して苦しめる性質を持つ人々がいるからである。これらの働きのために、例えば我々が技術や科学の分野において発展したように、不法なうそをつくこと、欺くこと、不正を働くこと、すなわち、それ故の犯罪的にふけることが増大する。なぜ、我々は、社会において、平穏で調和的な生活を送らないのだろうか。いま、我々は完全な 21 世紀にいて、人口の増加によってすでに苦しみ状況に直面している。このために、人類としての我々は、成長という名において、空気、水、そして、大地を汚している。

イスラーム教徒とヒンドゥー教徒の間の対立は、おそらく、インド以上に激しいところは、どこにもないであろう。そこでは、歴史的にヒンドゥー教徒とイスラーム教徒の市民たちはなんとか共存していた。この対立は、ほとんど相容れない神学上のものというわけではなく、生活習慣の衝突もあるはずである。イスラーム教徒とヒンドゥー教徒の社会において、例えば、社会的期待、習慣、食事、ジェンダーに関する見解などの相違があり、これらは共生を 2 つの宗教グループの課題にさせる。

ヒンドゥー教の概観

ヒンドゥー教は、最も広く、最も古い世界的宗教の一つである。今日の世界においておよそ 9 億人のヒンドゥー教徒がいるが、そのほとんどがインドに住んでいる。BBC が指摘するように、ヒンドゥー教は、特徴を述べたり、理解するには難解な宗教である。なぜなら、「単独の開祖がいなく、唯一の聖典がなく、共通に一致した一連の教えがない」からである。BBC は、ヒンドゥー教を、より簡潔に、宗教というよりは「生き方」と考えられるであろうと言及している。一般的にヒンドゥー教徒について言われうることは、彼らは、一連の宗教聖典群であるヴェーダに従い、崇め

ていること、業と輪廻の存在を信じていること、そして、主要な三神—シヴァ神、ヴィシュヌ神、ブラフマー神—と共に、最高神や一種の神的エネルギー—ブラフマン—と神的エネルギーの顕現である多くの神々や女神たちについて信じているということである。

イスラーム教の概観

イスラーム教は7世紀初頭に、預言者ムハンマドによって創始された。イスラーム教徒たちは彼を神の使徒として崇めた。イスラーム教徒たちにとって、ムハンマドに与えられ、最終的にコーランの名で知られる聖なる書物として書き留められた神の啓示は、人間への神の究極で完璧なお告げ、すなわち、例えば旧約と新約聖書のように先行する文献において見られる啓示の頂点に位置づけられる。イスラーム教の信仰の根本原則は、ヒンドゥー教の教義とは対照的に、唯一の神のみが存在するという主張である。

対立する教義

ヒンドゥー教とイスラーム教は、他の宗教に対する寛容さに関して異なる。ヒンドゥー教は基本的に寛容な宗教であり、他の信仰を尊重し、*Encyclopedia of Religion and Society* は「究極的なものの多様な道」として記述している。ヒンドゥー教の理想の一つが「不殺生（アヒンサー）」であり、それが意味するところは、ヒンドゥー教徒はどんな生物に対しても危害を加えてはならないということ懸念に試みなければならず、ヒンドゥー教の聖典は人類の最も早期の平和に関する記述をも含んでいるということである。他方、イスラーム教は、歴史的に、信仰の中心的教義としての拡大・征服・転換とともに、より攻撃的な宗教であった。あらゆるイスラーム教徒たちの条件の一つが、「ジハード」すなわち奮闘である。これは悪に打ち勝つ個人的な奮闘を指しているが、「聖戦」をも意味し、不信心者への対立状態でもある。

対立する生活習慣

イスラーム教徒とヒンドゥー教徒の間の生活習慣の違いの一つの鍵は、ジェンダーを伴う。おそらく、ヒンドゥー教の聖典において、女神に与えられた傑出した地位によって、ヒンドゥー教徒の女性たちは社会的に制限されておらず、同様に、イスラーム教徒の女性たちも、ある程度社会的である。しかしながら、同様の社会経済的な問題の多くが、両宗教の女性たちに対し、貧困、教育の欠如、虐待といった影響を及ぼしている。イスラーム教徒とヒンドゥー教徒も簡単には結婚できず、ある文化では、そうすることで死の危険を冒しているように。他の社会経済的な違いに関して、ヒンドゥー教はカースト制、すなわち人の社会的流動や雇用を制限する厳密に定義された社会的階層をより強調している。世俗主義—宗教と国家の分離—は、ほとんどのイスラーム文化においてよりも、ヒンドゥー文化においてより容易に受け入れられている。

これから、2つの宗教の対立と過去・現在の結果を議論したいと思う。両宗教における暴力を作り出す理由と改善策はなんだろうか。

【全文】

概要

宗教は、人間の歴史において、平和と暴力という二重の遺産を持つ。紛争解決の理論は、和解の方策が適切な文脈において効果があるため、宗教関係者や指導者の意思決定をより体系的に調査しなければならない。宗教と紛争解決の研究が、重要な新しい研究分野をもたらすということがここでの議論である。一連の項目は注視される必要があり、宗教的と実利的な態度が混在した動機付け、紛争を生み出す内部共同社会の道徳的価値と他の伝統的な価値の間の争い、紛争解決の方法としての多宗教の対話と多元主義、紛争発生と解決に関する宗教的指導者の社会政治的な衝撃、無信仰者と伝統的な外集団の排除についての宗教的倫理の視野の狭さ、そして、和解の方策を生み出すことにおける聖なる伝統の解釈の有望な役割を含む。

20 世紀における非暴力の偉大なる提案者であるマハートマー・ガンディーによれば、それは単なる個人の美德ではなく、それは、社会的、国家的、そして国際的なレベルで開拓され、それらまで広げられるべきである。大部分の著名人は、非暴力というガンディーの手法が今日の世界を救うことができるということを信じている。グローバル社会は絶えず変化する関係から成り立っているけれども、非暴力はいまだ有効である。なぜなら、それはあらゆる生物と生態圏の自然との親交の平等という内的実現から生じるからである。


イスラーム教のコーランには、平和についての優れた心構えがあり、それは次のように説かれる。「最も慈悲深い者の僕たちは穏やかに大地を歩く者たちであり、無知な者が彼らに〔厳しく〕語りかけるとき、彼らは平和あれ〔という言葉〕を言い」、そして、お互いの財産を（例えば窃盗したり、強奪したり、だましたりなどのどんな違法な方法でも）不当に浪費せず、また、不正に他人の財産の一部を故意に浪費するために、(提訴する前に判決を下す)裁判官たちに賄賂を与えてはならない。それは社会において平和に言及するための助けとなり、それは彼を支えるためのいかなる義務でもある。

ヒンドゥー教の聖典は、世界全体で、常に平和の概念を満たすことを望まれている。以下は（ヤジュル・ヴェーダ 36 からの）引用である。「天空に平和が、中空間に平和が、地上に平和があれ。水に冷たさが、薬草に治癒効果が、木から発する平和があれ。惑星と星において調和が、そして永遠なる知に完璧さがあれ。万物が平和であれ。平和がどこでも、いつでも行き渡れ。私が自身の心の中にその平和を感じるように。」

ヒンドゥー教とイスラーム教は、それぞれ、世界で 3 番目および 2 番目にポピュラーな宗教である。偶像崇拜、一神教、そして歴史を含めて、彼らは多くの点で異なる。

イスラーム教は一神教のアブラハムの宗教であり、7 世紀に中東で予言者ムハンマドによって創始された。他方、ヒンドゥー教は、古典期以前の時代（紀元前 1500～500 年）のインド亜大陸に起源を持つ宗教的伝統で、特定の開祖を持たない。

両宗教における信仰体系の比較

	ヒンドゥー教	イスラーム教
		
死生観	悟りに達すまで輪廻転生の繰り返し	理により創造されたあらゆる存在は、審判の日に、全能なる神に対して責任がある。彼らはすべての原子の善行の重さに対して報酬が与えられるか、あるいは悪行に対して許されるか罰せられる。
発祥地	インド亜大陸	アラビア半島、ヒラー山マッカ（メッカ）
崇拝場所	寺院（Mandir）	モスク／マスジド、イスラームの基準によって清浄とみなされたあらゆる場所
実践	瞑想、ヨーガ、観想、ヤジュニャ（共同体崇拝、儀礼）、寺院での供物	五柱：神は唯一にしてムハンマドはかの使者であると証言すること（シャハーダ）、日に5回の礼拝、ラマダーン月の断食、貧しい者への施し（ザカート）、巡礼（ハッジ）
彫像や図像の使用	共同	神や預言者の偶像は許されていない。芸術はカリグラフィーや建築などの形態を課す。イスラーム教徒は生きているような人間の作品を描かないことによって他のグループから自身を区別する、偶像崇拝として間違われてしまうから。 神を象徴する偶像もない。
Belief of God	多神であるが、あらゆるものがアートマンに由来すると理解する。	唯一なる神（一神教）。神は唯一の真なる創造者。神は常に存在し、神より前に何も存在しなく、永遠に存在する。神は生と死を超越する。創造物で神に似たものはなく、神は不可視にして、全視である。

インドのイスラーム教徒たち——1億7200万人を超える信者（2011年）——イスラーム教は、ヒンドゥー教に次いで、インドで2番目に大きな宗教である。イスラーム教徒は、ヒンドゥー教徒に次いで2番目に大きなコミュニティであり、インド共和国における全人口の14.6%を形成している。インドにおけるイスラーム教の歴史は12世紀に遡るのだが、インドは、現在、世界のイスラーム教徒人口の10%を超える居住地である。インドネシア、パキスタンに次いで、インドは、世界において3番目に大きなイスラーム教徒人口の居住地である。ムスリムすなわちイスラーム教を信奉する人々は、インド中で、相当数に達する。インド人のイスラーム教徒のほぼ半分（47%）は、ウッタル・プラデーシュ、西ベンガル、ビハールの3つの州に住んでいる。イスラーム教徒は、ヒン

ドゥー教徒に次いで 2 番目に大きなコミュニティであるので、インドにおける宗教人口の重要な部分である。ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒たちは、共に、活気に満ちたインド文化の不可欠な部分を形成している。

2016 年のインドにおけるイスラーム教徒の人口——宗教としてのイスラーム教は、インドの様々な州で、その人口の急激な増加を示している。インドの国勢調査によると、2016 年のイスラーム教徒の人口は、1 億 8,400 万であると推定される。

インドのヒンドゥー教徒人口——インドは多くの宗教の発祥地として知られているが、ヒンドゥー教は最も重要なものである。ヒンドゥーの宗教は、インドで何千年前に始まったと信じられている。それ以来、インドの文化と社会で最も支配的である。インドにおけるヒンドゥー教徒の人口は 79.8%以上で、ヒンドゥー教はインドで最大数の信者を持つ。インドの全人口は、ヒンドゥー教とその伝統によって支配的である。ヒンドゥー教は、国に縦横無尽に広がっている。インドのほとんどすべての州や連邦直轄領は、ヒンドゥー教徒の人口が大多数を占めている。マディヤ・プラデーシュ州とオリッサ州は人口の 90%がヒンドゥー教徒である。これらの 2 つの州では、残りの 10%が、イスラーム教徒、キリスト教徒、ジャイナ教徒、シク教徒のような他の宗教が構成している。ヒンドゥー教の行事やお祭りが年中祝われている。例年クンバ・メーラーは、インドおよび世界中の数百万のヒンドゥー教徒が参列している。

インドにおけるヒンドゥー教徒の人口

総人口	ヒンドゥー教徒の人口	インドのヒンドゥー教徒人口の割合
1,028,610,328 (2001)	827,578,868	80.5%
1,210,854,977 (2011)	966,345,841	79.8%
1,288,727,391 (2015)	1,018,094,638	79%

インドにおけるイスラーム教徒に対する暴力は、インドでの宗教的暴力の一部である。しばしば、多数派ヒンドゥー教徒コミュニティと少数派イスラーム教徒コミュニティの間で散発的な宗教対立のパターンを形成するヒンドゥー暴徒によるイスラーム教徒への強襲という形で、1947 年のインド分離独立から、イスラーム教徒に対する宗教的暴力のいくつかの例があった。10,000 人以上の人々が、1950 年以降ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒のコミュナル暴力において、1954~1982 年の間のコミュニティ暴力の 6,933 例において、死んだ。

このイスラーム教徒に対する暴力の原因は様々である。起源は、インドの歴史にあると考えられる、すなわち、中世インドでのイスラームによる支配に対する憤り、国家のイギリス人植民者によって制定された政策、イスラーム・パーキスターンと少数派イスラーム教徒を伴った世俗主義インドへのインドの暴力的な分離・独立である。反イスラーム暴力事件は、政治的に動機づけられ、そして、インド人民党のようなヒンドゥー至上主義と関係している主流派政党の選挙戦略の一部であると、多くの学者たちは考えている。他の学者たちは、地方の社会政治学的な状況のために、暴力は広範囲にわたるのではなく、特定の都市部に限定されていると考えている。

示威行動

イスラーム教徒に対する暴力は、しばしば、ヒンドゥー教徒によってイスラーム教徒を襲撃する暴徒という形をとる。これらの攻撃はインドでコミュナル暴動（communal riots）と呼ばれて、多数派ヒンドゥー教徒コミュニティと少数派イスラーム教徒コミュニティの間に散発的な宗教対立のパターンの一部と見られものであり、そして、20 世紀を通してイスラーム嫌悪（Islamophobia）の増加にも関連してきた。ほとんどの事件がインドの北や南の州で起こったのに対して、南と東のコミュナル主義者の意見はあまり発せられていない。最も大きな事件の中でも、1946 年カルカッタ虐殺（Great Calcutta killings）、1946 年東ベンガルでの Noakhali 暴動の後のビハールと Garmukhteshwar、1947 年ジャンムーにおけるイスラーム教徒の大虐殺、ハイダラーバードにおけるポロ作戦に続くイスラーム教徒の大規模虐殺、1950 年 Barisal 暴動と 1964 年東パーキスタン暴動の余波によるコルカタにおける反イスラーム教徒暴動、1969 年グジャラート暴動、1984 年 Bhiwandi 暴動、1985 年グジャラート暴動、1989 年 Bhagalpur 暴動、ボンベイ暴動、1983 年 Nellie、2002 年グジャラート暴動、2013 年 Muzaffarnagar 暴動があった。これらの暴力のパターンは、分離独立以来、少数派グループに対する集団暴力の実例を立証する多数の研究と共に、明らかにされてきた。1950 年から、10,000 人以上の人々が、ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒とのコミュナル暴力の中で、殺されてきた。公表された数によれば、1954 年と 1982 年の間に、また、1968 年と 1980 年の間に、6,933 例のコミュナル暴力があり、ヒンドゥー教徒 530 人、イスラーム教徒 1,598 人が殺された合計 3,949 例の集団暴力があった。1989 年に、北インド全体で集団暴力事件があった。Praveen Swami はこれらの断続的な暴力行為が「インドの独立後の歴史に傷跡を残し」、さらにカシュミール紛争に関してジャンム・カシュミールにおけるインドの原因をも阻害してきたと信じている。

この暴力の起源は、中世インドにおけるイスラームの支配に対する遺恨、国家のイギリス人植民者によって制定された政策、イスラーム教徒のパーキスタンと大きいが少数派イスラーム教徒住民を伴った世俗主義のインドへと「分かれた」暴力的なインドの分離独立から生じるインドの歴史に存在している。何人かの研究者たちが反イスラーム暴力事件を政治的に動機づけられ、組織化されたものとして記述し、そしてそれらを、単なる「暴動」というよりもむしろ「組織的で政治的な大虐殺」を伴った、虐殺（pogroms）、集団虐殺行為（acts of genocide）、あるいは国家（州）テロの一形態と呼んだ。他の研究者達は、彼らのコミュニティが差別と暴力に直面したとしても、多くのイスラーム教徒は大いに成功していたのであり、暴力は見えるほど広範に広がっておらず、地方の社会政治的な条件のためにある特定の都市部に制限され、そして多くの都市はイスラーム教徒とヒンドゥー教徒の宗教対立の発生がほとんどなく共に平和に生活していると論じている。インドにおける反イスラーム暴動では、一人のヒンドゥー教徒のために、3 人のイスラーム教徒が殺されるということがある。ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒の間の経済競争も、特にイスラーム教徒の企業が標的とされた計画的な暴動をもたらす。

政党の役割

多くの社会学者が感じていることは、これらの暴力行為の多くが、制度上、ヒンドゥー至上主義者の志願団体—すなわち民族義勇団（ラーシュトリヤ・スヴァヤムセワク・サング、RSS）

一と特に関連した政党や組織によって、支援されているということである。特に、研究者は、暴力〔そのもの〕とより大きな選挙戦略の一部としてイスラーム教徒に対する暴力を使用することという、これらの事件における共謀に関してインド人民党（バーラティーヤ・ジャナター・パーティー、BJP）とシヴ・セナーを批判している。例えば、Raheel Dhattiwala と Michael Biggs による研究は、BJP が断固とした選挙の反対を受ける地域においての方が、それ（BJP）〔の勢力が〕すでに強い地域においてよりも、虐殺がはるかに激しいということを提示した。1989 年、北インドでは、イスラーム教徒に対する組織化された攻撃の増加が見られ、そして、BJP は地方および国政選挙においてさらなる成功を収めた。社会人類学者の Stanley Jeyaraja Tambiah は、1989 年 Bhagalpur、1987 年 Hashimpura、1980 年 Moradabad での暴力は組織的な殺害であったと結論づけている。Ram Puniyani によれば、シヴ・セナーは 1990 年代における暴力に起因して、BJP は 2002 年以降のグジャラートにおける暴力に起因して、選挙で勝利したという。しかしながら、Gyan Prakash は、グジャラートでの BJP の行動がインド全体と同等ではなく、また、Hindutva 運動がこの全国的な戦略の発展において成功したどうかはまだ分からないと指摘する。

経済的・文化的な要因

ヒンドゥー教至上主義者たちは、暴力の理由として、歴史的事実であるイスラーム教徒によるインド征服を用いる。彼らの見解は、これらの征服者がヒンドゥー教徒の女性たちを暴行し、礼拝所を破壊したということである。彼らは、分離独立以来、インドのイスラーム教徒はパーキスターンと同盟してテロリストの可能性があり、そして、それ故に、ヒンドゥー教徒たちはこれらの過去の誤りに対して復讐し、誇りを再び主張しなくてはならないと感じている。イスラーム教徒の中のより高い出生率は、ヒンドゥー教徒の正当性のレトリックにおいて、繰り返されるテーマであった。彼らは、イスラーム教徒の中のより高い出生率がヒンドゥー教徒を自国の中で少数派に変える計画の一部であると主張している。これらの暴力の突発に関して与えられた別の理由は、経済発展に起因した低カースト上昇である。暴力は身分間の緊張の代用となった。至上主義者たちは、下層階級からの要求を扱うというよりも、代わりに、イスラーム教徒とキリスト教徒たちを彼らの宗教のせいで「完全なインド人ではない」と見なし、そして、これらの攻撃を実行する人々を「反国家主義」から多数派を守った「英雄」として描写する。イスラーム教徒は疑わしいと見なされ、そして彼らの愛国心は分離独立の際の暴力のせいでますます広まった悪意のために疑われる。Omar Khalidi によれば次のように言われる。

反イスラーム教徒の暴力は、イスラーム教徒を経済的・社会的に不自由にさせ、そのような経済的・社会的に遅れたものとしての最終的な帰結として、ヒンドゥー教徒社会のより低い地位へと同化させるために、計画され、実行される。

文化至上主義も、初めにマハーラーシュトラの人々を代弁すると主張したシヴ・セナーによって実行された暴力の実例のための理由として、提供された。しかし、早急に、彼らのレトリックがイスラーム教徒に対する暴力を刺激することになった。シヴ・セナーは、1984 年に Bhiwandi の街で暴力を共謀し、1992 年と 1993 年にボンベイで再び共謀した。これらの例の両方とも、セナーは警察と地方公務員からの手助けを受けた。暴力は、1971 年と 1986 年に、セナーによって煽動された。Sudipta Kaviraj によれば、世界ヒンドゥー協会（ヴィシュヴァ・ヒンドゥー・パリシ

ャッド、VHP) は、いまだ中世に始まった宗教対立に従事しているという。

反イスラーム教徒暴力は、インドの外で居住するヒンドゥー教徒に対して、安全上のリスクを生み出す。1950 年代以降、インドにおける反イスラーム教徒暴力に応じて、パーキスタンとバングラデシュにおいて、ヒンドゥー教徒に対する報復攻撃があった。1992 年ボンベイにおける暴力の後で、イギリス、ドバイ、タイで、ヒンドゥー教寺院が攻撃された。この繰り返される暴力はイスラーム教徒とヒンドゥー教徒のコミュニティ間の分裂を生み出す膠着した因習的なパターンとなった。

Jamaat-e-Islami Hind は、暴力はイスラーム教徒だけではなくインド全体に強い影響を与え、そしてこれらの暴動がインドの進歩に損害を与えると考え、これらのコミュナル衝突を非難した。1992 年と 1993 年、グジャラートで、テロリスト・破壊活動（防止）法（TADA）が、コミュナル暴力に関する事件において使用された。その法令の下で逮捕された大多数の人たちはイスラーム教徒であった。逆に、ボンベイ暴動の際にイスラーム教徒に対して実行された暴力の後では、TADA は使用されなかった。

人口統計

BJP の政治家は、他の政党の者たちと同様に、人口統計がインドの選挙において重要な役割を果たすと主張している。BJP は、選挙区の内のイスラーム教徒の数が多いほど、少数派の要請を黙認する中道政党の勝機が高くなり、そしてそのことはヒンドゥー教徒の隣人と共に「橋をかける」イスラーム教徒の勝機が低くなると考えている。そのようなものとして、この論法によれば、「イスラーム教徒との融和政策」はコミュナル暴力の根本原因となる。Susanne と Lloyd Rudolph は、経済格差がヒンドゥー教徒によってイスラーム教徒に向けられた侵害の理由であると主張している。インド経済がグローバリゼーションと外国企業からの投資により発展したとき、ヒンドゥー教徒住民の期待は好機と合わなかった。次に、ヒンドゥー至上主義者たちは、ヒンドゥー教徒の問題の発生原因としてのイスラーム教徒のとらえ方を奨励した。

カシュミールとパーキスタンにおける反ヒンドゥー教、反インドの過激派組織の活動は、インドでの反イスラーム教徒感情を強くし、ヒンドゥー教徒の正当性を強固にした。Hindutva 論争はイスラーム教徒を反逆者や国家の敵として表現し、彼らのその愛国心が疑われている。Sumit Ganguly はテロリズムの増加は、社会経済学的要因に帰されるだけでなく、Hindutva 勢力によって犯された暴力にも帰されると主張している。

主要な事件

1964 年コルカタ

ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒の間の暴動が、100 人以上の死者、438 人の負傷者がでた。7,000 人以上の人々が逮捕された。70,000 人のイスラーム教徒が自身の家から逃れ、55,000 人がインド陸軍によって保護された。コルカタのイスラーム教徒は、この暴動の余波で、これまでよりいっそう孤立化させられた。暴動は、東パキスタン（現バングラデシュ）におけるヒンドゥー教徒に対する暴力とそこからの難民の流れによって、煽動されたと信じられていた。暴力は、西ベンガルの田舎町でも見られた。

1983 年 Nellie 大虐殺

アッサム州で、1983 年に Nellie 大虐殺が起こった。1,800 人近くのベンガル人を祖先に持つイスラーム教徒が、Nellie と呼ばれる村で (Tiwa として知られる) Lalung 部族民に惨殺された。それは、アッサム運動の行動の結果として、犠牲者の多くが女性と子供たちのために、第二次世界大戦以来最も容赦のない大虐殺の一つだといわれている。

この事件に関して引合いに出された理由の一つは、それが移民への憤慨の高まりに起因したということである。アッサム運動は、選挙人名簿から密入国者の名前を抹消することと彼らの国外追放を強要した。その運動に対する幅広い支援があったが、1981 年と 1982 年の間に次第に衰えた。その運動は、1951 年から、どんな不法な入国者であっても追放されるということを強要した。しかしながら、中央政府は、1971 年の期限を強く打ち出した。1982 年の終わりに向かって、中央政府は選挙を呼びかけ、運動側はそれをボイコットするよう人々に呼びかけたが、それは広範囲にわたる暴力へとつながった。

Nellie 大虐殺に関する The official Tiwari Commission の報告はいまだ嚴重に極秘にされている (3 部のコピーのみが存在する)。600 ページの報告書は、1984 年にアッサム州政府に提出され、(Hiteswar Saikia によって率いられた) 議会政府はそれを公表しないことに決定し、次の政府も後に続いた。事件後、少なくとも 25 年後に、合理的な判決が被害者に引き出されるように、アッサム統一民主戦線 (Assam United Democratic Front) とその他は、Tiwari Commission の報告を公表させるための法的な努力をしている。

1969 年から 1989 年

1969 年のグジャラート暴動の際に、630 人の人々が命を失ったと推定されている。1980 年に、Moradabad で、推定 2,500 人の人々が殺された。公式の試算は 400 人、他のオブザーバーの試算は 1,500 人と 2,000 人の間である。地元の警察が、直接、暴力の計画に関係があるとされた。1989 年に、Bhagalpur で、およそ 1,000 人の人々が暴力的な攻撃で命を失ったと推定され、Ayodhya 論争や VHP の活動家によって実行された行進により高められた緊張の結果であると考えられ、そしてそれらは強さの誇示や少数派コミュニティに対する警告としての機能を果たした。

1987 年 Hashimpura 大虐殺

Hashimpura 大虐殺は、1987 年 5 月 22 日に、インド・ウッタルプラデーシュ州の Meerut 市におけるヒンドゥー教徒とスラーム教徒の暴動の際に起きた。伝えられるところによると、Provincial Armed Constabulary (PAC、州武装警察) の 19 名は、同市の Hashimpura mohalla (地域) から 42 人のイスラーム教徒の青年をよせ集め、彼らを Ghaziabad 地区の Murad Nagar 近くの郊外に連れて行き、そこで彼ら (青年たち) は銃撃され、運河の中に捨てられた。数日後に、死体が運河に浮かんでいるところを発見された。2000 年 5 月に、19 人の被告のうち 16 人が起訴され、後に保釈されたが、一方、3 人はすでに死んでいた。その事件の裁判は、インド最高裁判所によって、2002 年に Ghaziabad からデリーの Tis Hazari 複合施設群にある刑事裁判所に移され、そこで最も古い係争中の事件となっている。

1992 年ボンベイ暴動

ヒンドゥー至上主義者による Babri モスクの破壊は、直接、1992 年のボンベイ暴動を引き起こした。BBC 特派員の Toral Varia は、暴動を「あらかじめ計画された虐殺」(a pre-planned pogrom) と呼び、1990 年から進行中であって、そのモスクの破壊が「最終的な挑発」であったと述べた。いくつかの研究者が、同様に、暴動が間違いなくあらかじめ計画されており、ヒンドゥー教暴徒が非公開の情報源からイスラーム教徒の家と職場の位置についての情報提供がなされていたと結論づけた。この暴力は、Bal Thackeray に率いられたヒンドゥー至上主義集団シヴ・セナーによって調整されていたと広く報道された。特殊部門の高位のメンバーである V. Deshmukh は、暴動の徹底調査が課された委員会へ証拠を提供した。情報収集と防止における失敗は、Ayodhya のモスクが保護されるであろうということ、少なくとも暴力行為を辞さないシヴ・セナーの性質に警察は気づいていたということ、それらは少数派コミュニティに対する憎悪を誘発したということ、という政治的な確信に起因していたと彼は語った。



ビルや商店は暴徒によって火がつけられ、煙で満たされた Ahmedabad のスカイライン

2002 年グジャラート暴力行為

本論：2002 年グジャラート暴力行為

分離独立以来、イスラーム教徒のコミュニティは、グジャラートにおいて、宗教対立の支配下であり、そしてそれに従事してきた。2002 年、「ファシスト的州のテロ」行為として記述された事件において、ヒンドゥー教過激論者が、進行中の宗教対立と、しばしばパーキスターン諜報局によって支援され、地方のイスラーム教徒住民の中で支援が増加しつつある、急進的イスラーム原理主義者による迫害に対する報復として、少数派イスラーム教徒住民に対して暴力行為を実行した。事件の出発点は、伝えられるところでは、イスラーム教徒によって行われた Godhra 列車火災であった。事件の際に、若い少女たちが性的に暴行され、燃やされるか切り殺された。これらの暴行は与党 BJP によって黙認され、彼らの調停拒絶が 200,000 もの強制退去に迫りやった。死亡者数は、ヒンドゥー教徒 254 人、イスラーム教徒 790 人が殺されたという公式の試算から、2,000 人のイスラーム教徒が殺されたところまで及ぶ。そして、参加した警察と政府役人が所持し、彼らが暴徒に指示して、イスラーム教徒が所有する不動産のリストを過激派に与えたので、州首相ナレーンドラ・モーディーも暴力を提案し、容認したとして告訴された。

暴力における共謀について州に陳情していた Mallika Sarabhai は、BJP によって苦しめられ、脅迫され、不正人身売買の罪で告発された。BJP は、それらの地区での暴動を鎮圧した後に、暴力の防

止がこれ以上妨げられないように、彼らによって、3人の警官に懲罰的異動が科された。Brassによると、入手可能な証拠からの唯一の結論は組織的な虐殺を指摘するのみであり、それが「並外れた残虐行為」として実行され、「非常に高次に組織的であった」ということである。

2007年に、Tehelka magazineが「The Truth: Gujarat 2002」という報告を公表したが、その報告は、州政府を暴力に関連させ、自然発生的な報復行為とされたものが、実際には、「州によって容認された虐殺」であったと主張したものであった。ヒューマン・ライツ・ウォッチによれば、2002年のグジャラートでの暴力行為はあらかじめ計画され、警察と州政府は暴力に加わったという。2012年に、モーディーは最高裁判所によって任命された特別調査チームによって暴力における共謀の嫌疑が晴らされた。イスラーム教徒コミュニティは「怒りと疑い」で反発したと伝えられ、そして活動家 Teesta Setalvad は、彼らは控訴する権利があるので、法律上の争いはまだ終わっていないと語った。ヒューマン・ライツ・ウォッチは、イスラーム教徒を暴力行為から守ろうとしたヒンドゥー教徒、ダリット、部族民たちの卓越した英雄的行為について報告した。

インドにおけるヒンドゥー教徒に対する暴力

インド亜大陸のイスラームの征服は、8世紀初頭中に始まった。ウマイヤ朝がダマスカスを統治していたとき、Hajjaj は、Debal 海岸沖の海賊によるイスラーム教徒の女性たちや財宝の強奪によってもたらされた戦争動機に、712年、Muhammad bin-Qasim のもと 6,000 の騎兵遠征軍を動員することで応じた。この軍事行動について、*Chach Nama* に、寺院破壊、抵抗する Sindhi 軍の大量処刑とそれら従属地の奴隷化が記録されている。この行為は Debal で特に大規模であって、Qasim は、捕えられた女性たちと以前失敗した遠征軍の捕虜を解放している間に、その行為を見せしめにせよとの命令を受けていたと伝えられる。次に、Bin Qasim は、地域内の Jat、Meds、Bhutto などの部族の支援を得て、地方勢力の押さえ込みと征服の遂行を開始した。街の占領も、通常、彼の「敵」の中からの一派―彼らはその際に特権と物質的な報酬が施された―との条約を用いて達成された。しかしながら、彼の上官にあたる Hajjaj は、伝えられるところによれば、それが彼を弱く見えさせるであろうと言って彼の方法に反対し、「今後、敵の誰一人にも恩赦を与えず、命を助けるな。さもなく全ての人があなたを意志弱き男とみなすであろう」と言って、いっそう強硬路線の軍事戦略を提唱した。

これらの迫害の早期の実例によれば、Bin Qasim は宗教的な政策においては寛大であったと言われる。シンドにおけるアラブの成功の 60% 近くが、征服よりむしろ条約を通じて確立された。ヒンドゥー教徒と仏教徒は dhimmi（保護された人々）として扱われ、jizya（非イスラーム教徒に対する税金）を支払う義務以外に、彼らの信仰を实践する自由を残した。歴史家 Mohammad Habib は、「Muhammad Qasim は、多くのインドに対するイスラーム侵略者の中で唯一、良心的なイスラーム教徒たちが恥ずかしく思う必要がない性質である」と語っている。Bin Qasim の政策は、後にアラブ政府によって引き継がれ、そして、シンドは貿易と商業の新しいイスラームのネットワークを通じて繁栄した。

ガズニのマフムード



Somanatha Temple Prabhas Patan, Gujarat, from the Archaeological Survey of India, taken by D.H. Sykes in c.1869

ガズナ朝のスルターン、ガズニのマフムードは、11 世紀初頭の間にインドの亜大陸を侵略した。ガンジス平野を横断する彼の軍事行動では、しばしば、略奪的偶像破壊主義者と寺院の破壊があげられる。マフムードの宮廷歴史家ウトビーは、マフムードの遠征について、イスラーム教を普及させ、偶像崇拝を根絶するためのジハードとみなした。マフムードは個人的にはヒンドゥー教徒を憎んでいなかったかもしれないが、彼は戦利品を求めている、そして、ヒンドゥー教の寺院と偶像を冒涇することによって得られたイスラーム世界における栄誉と賞賛を歓迎した。マトウラーでの彼の軍事行動について、次のように説明される。

すべての寺院をナフサと火で焼き、更地にせよという命令がくだされた。都市は 20 日間略奪されてから明け渡された。略奪品の中には、多数の小さい銀の像とともに、ルビーの目と他の貴重な石の装飾品を持つ純金でできた重要な 5 体の偶像があり、それらはそのときに壊され、荷を運ぶラクダ 100 匹以上分の荷が作られたと言われている。

マトウラーからの略奪品は 300 万ルピーと 5,000 人以上の奴隷と試算される。

軍事歴史家 Victoria Schofield によれば、カズニのトルコ人支配者でありマフムードの父である Sabuktigin は、「Peshawar の谷とまだ呼ばれていた、Kabul 盆地と Gandhara (Khandar) から、ヒンドゥー教徒を排除することを目的とした。彼の息子であり成功者、カズニのスルターン、マフムードは、ヒンドゥー教徒に対する聖戦をインドにもたらすという任務を続けた」とされる。西暦 980 年まで、この Gandhara 領域は、カズニから Sabuktigin までヒンドゥー教の支配下にあって、[マフムードは]そこを侵略して、そしてその最後のヒンドゥー教徒の Shahi 王 Jaya Pala を追放した。Shahi は、その時、西北インドで重要な王国であった。(Ibn Batuta など) いくつかの典拠によれば、おそらく、侵略者が平野からヒンドゥー教徒の捕虜を捕え、連れ去るが、彼らが山で凍死してしまうので、ヒンドゥー・クシュ山脈の名前は、「ヒンドゥー教徒殺し」を意味するという。

ガズニのマフムードは、1026 年に 2 度目に〔建立された〕Somnath 寺院を略奪し、それを奪い去り、その寺院の有名なシヴァ・リングは破壊された。ラージプート連合の敗北に続いて、彼ら抵抗勢力連合に報復することを決定した後に、マフムードは、パンジャブ地方だけを併合するのみで、ヒンドゥー教徒の家臣の管理下にある征服した王宮を離れて、彼らに対する通常の遠征に出発した。1665 年には、その寺院は、多くのうちのひとつであるが、ムガル皇帝アウラングゼーブによって再び破壊されるよう命令された。

マフムードは徹底的に国の繁栄を破壊し、驚くべき偉業を成し遂げ、それによって、ヒンドゥー教徒は、四方八方に飛散した微量のほこりのようになり、昔話のように人々に記憶されるようになった。ガズニのマフムードに同伴した歴史家 Alberuni は、マフムードがその地域を不毛にし、そして、四散したヒンドゥー教徒の文明社会が衰退して西北部から撤退したということを述べて、北西インドにおける征服地を記述した。

まさにこれが、ヒンドゥー教学問が、我々によって征服された国のこれらの部分から遠く離れて退き、そして、我々が未だ到達していない場所、カシュミール、バナーラス、その他の地域へと逃れた理由である。

Holt などが抱く反対意見では、彼は「単なる強盗でも忌々しい冷酷な暴君」でもなかったという。マフムードは、「戦争の要求を除いて」殺戮はせず、彼自身のヒンドゥー教徒の家臣の扱いは寛大であって、彼らのうち、ヒンドゥー教徒の将軍 Tilak のように、統治における高い地位につく者もいた。

インドに対するティムールの軍事行動

1397 年、ティムールは北インドのデリーにあるトゥグルク王朝のスルターン Nasir-u Din Mehmud が統治する領域を侵略するために進軍を開始した。彼は、9 月 24 日 Attock にてインダス川を渡った。街と村の占領後に、しばしば、彼の巨大な軍隊の支えのもと略奪しただけでなく、住民を虐殺し、女性たちを暴行した。

ティムールの侵略は反抗がないわけではなく、デリーへの進軍中にいつか抵抗に会い、特に注目すべとは北インドの Sarv Khap の連合と Meerut の統治者によるものであった。Ilyaas Awan の勇敢さに心打たれ、しばらくの間足止めさせられたが、ティムールはデリーへの容赦ない侵略を続けることができ、王室内部の即位に関する内部抗争によって既に弱っていたスルターン Mehmud の軍隊と戦うために 1398 年に到達したのであった。スルターンの軍隊は、1398 年 12 月 17 日に簡単に打ち負かされた。ティムールはデリーに入り、街は略奪され破壊され、廃墟にされた。デリーでの戦いの後に、ティムールは 10 万人以上の捕虜を処刑した。

デリーを略奪している間、殺されなかった住民のほとんどは捕えられ奴隷にされた。ティムールはおおよそ 1399 年の 1 月にデリーを去った。4 月には、彼はオクサス川 (Amu Darya) を越えて、彼の首都に戻っていた。莫大な略奪品は、Samarkand のモスクを建設するためにインドから持ち去られた。そのモスクは今日の歴史学者たちは巨大な Bibi-khanyam モスクであると考えている。皮肉にも、モスクはかなり急いで建てられ、建設から数 10 年のうちに荒廃によりかなり傷んだ。

ティムールが 1398-99 年にインドを侵略したとき、奴隷の収集は、彼の軍隊にとって重要な目的となった。10 万人のヒンドゥー教徒の奴隷たちが彼の兵士や同志によって捕らえられた。敬虔な聖者でさえも 15 人の奴隷をひとまとめにした。痛ましいことに、すべての者が、反逆者かもしれないという恐怖から、デリー侵略の前に虐殺されてしまった。しかしデリー占領後、住民たちは連れ出され、ティムールの貴族のに、数千人の職人と専門家を含む捕虜を奴隷として割り当てた。

デリー・スルターン朝

Firuz Shah Tughlaq

Firuz Shah Tughlaq はデリー・スルターン朝におけるトゥグルク王朝の第 3 代皇帝である。

Tarikh-i-Firuz は、彼の時代に書かれた歴史書であり、それは彼の知世のもとヒンドゥー教徒への組織的な迫害を証明している。特に、それは、イスラーム教への改宗を拒むヒンドゥー教のバラモン祭官になされた残虐行為を次のように記録している。

したがって、命令はバラモンに与えられ、スルターンの前に連れられた。真の信仰がバラモンに明示され、正しい道が示された。しかし、彼はそれを受け入れることを拒否した。積み上げられた薪の上に手足をつながれた Kaffir が放たれ、てっぺんには木製の板がおかれた。彼の頭と脚の二か所の薪が燃やされた。炎は初めに彼の足に到達し、彼から叫び声を引き出し、それから完全に彼を覆った。法に対して厳格に忠実で公正なスルターンに着目せよ。

彼の知世において、義務であるジズヤ税を払うよう強いられたヒンドゥー教徒は、異教徒として記録され、彼らのコミュニティは監視され、そしてもし王の命令に背いたり、寺院を建てたりしたら彼らは殺された。特に、ハリヤーナーの Gohana 村で起きた事件は、*Insha-i-Mahry* (Amud Din Abdullah bin Mahru によって書かれた別の歴史書) に記され、そこでは、ヒンドゥー教徒が神像を建立し、拘束され、宮殿に連れて行かれ、そして集団で処刑された。

1230 年、オリッサのヒンドゥー教徒の王 Anangabhim III は、彼の統治を強め、オリッサへの攻撃は、王の神への攻撃とみなすと公言した。ヒンドゥー教文化を守る Anangabhim の決意表明は、カルカッタに Abhinava Varanasi という新しい首都を名付けたということである。イスラーム教のオリッサへのさらなる進行いに対する彼の不安がよく分かるものであった。

ムガル帝国時代

マトウラーの Kesava Deo 寺院は、ヒンドゥー教徒がクリシュナ神の生誕地と信じている場所として示される。1661 年、アウラングゼーブは寺院の破壊を命じ、Katra Masjid モスクを建立した。古代ヒンドゥー教寺院の跡が、モスクの裏から見られる。アウラングゼーブはまた、バーラーナシーで最も有名な寺院であった Vishwanath 寺院を破壊した。寺院は長年にわたって場所を変えてきたが、1585 年にアクバルが Gyan Vapi にそれを置くことを認めた。アウラングゼーブは、1669 年にその破壊を命じ、その場所にモスクを建立した。そのミナレットはガンガーの 71 メートル上流に建てられている。古い寺院跡が、モスクの裏に見られる。数世紀後に、これらの文化的な冒涇という理不尽な行為に対する感情的な議論が続いている。アウラングゼーブはまた、1706 年に Somnath 寺院を破壊した。さらに、アウラングゼーブの統治時代、スィク教のグル、Guru Tegh Bahadur は、イスラーム教への改宗から逃げるカシミールのパンディットたちを援護し、アウラングゼーブによって拘束された。彼は、イスラーム教への改宗か死かを選ぶよう言われたとき、彼は自身の主義を妥協するよりも死を選び、そして処刑された。

さらに近年、ムガル帝国が、ラーマの生誕地に位置するアヨーディヤーにおいて Ram 寺院を破壊し、その聖地に Babri マスジッドを建てたとヒンドゥー教徒たちは主張し、以来、ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒コミュニティ間の緊張の原因となっている。考古学的な調査に従って、アラールハーバード最高裁判所は、2010 年に、Babri マスジッドは「非イスラーム様式」のより早期の建築物の跡に建っており、2,400 平方フィート (220 m²) の係争地を、3 つの区画、すなわち寺院建設のための Ramlalla (幼少期のラーマ)、モスクのための Sunni Wakf Board、Sita ki Rasoi と Ram Chabutara のための Nirmohi Akhara に分けるという判決を下した。

A History of Civilizations において、著者の Fernand Braudel は、インドでの「植民地的な実験」と

してのイスラームの統治は「極めて暴力的」であるとし、そして「イスラーム教は組織的な恐怖によらない限り、国を統治することができなかった。残酷さが行動規範で、火刑、略式の処刑、はりつけあるいは串刺し、さまざまな拷問といったものであった。ヒンドゥー教寺院は、モスクへの道を作るために破壊された。時折、強制的な改宗があった。反乱がある場合は、それは直ちにそして乱暴に抑圧された。すなわち、家は燃やされ、地方は荒廃させられ、男たちは虐殺され、女たちは奴隷として連れて行かれた」と記している。

ハイダル・アリーとティプー・スルターン



ハンピのヴィジャヤナガル王国の遺跡、1868年の写真、現在ユネスコ世界遺産

Tipp Sultan は、ヒンドゥー教徒の宗教的な迫害者であったという歴史家がいる。C. K. Kareem もまた、Tippu Sultan はケーララのヒンドゥー教寺院の破壊命令を発したと述べている。ヒンドゥー教徒の団は、Tippu Sultan を、ヒンドゥー教徒を虐殺した偽善者として罵った。彼はヒンドゥー教とキリスト教を強制的に改宗したとして知られている。

Tippu は、イスラーム軍隊の侵略によって包囲されたコダグ人（Coorg や Coorgi と呼ばれる）のヒンドゥー教徒たちを奇襲して、Kurool の Nawab、Runmust Khan を獲得した。500 人が殺され、4 万人以上のコダグ人は森に逃げ山に隠れた。何千ものコダグ人ヒンドゥー教徒たちが王と共に捕えられ、Serlingapatam (Srirangapatana) で捕虜となった。彼らはまた、イスラーム教徒へ強制改宗、死や拷問を余儀なくされた。

Serlingapatam において、無理やり割礼を施された若者は Ahmedy 教団に入団させられ、そして彼らは 8 つの Risala すなわち連隊を形成した。その活動で捕えられたコダグ人たちの実際数は不明である。イギリス人統治者 Mark Wilks がその人数を 7 万人とし、歴史学者 Lewis Rice が 8 万 5 千人としている一方で、Mir Kirmani によるコダグの軍事行動の人数は、拘置された 8 万人の男性・女性・子供とされている。Runmust Khan への手紙に、Tippu ティプー自身で次のように述べている。

「我々は最大限の速さで続行し、機会を探り混乱を起こしているコダグの者たち 4 万人をすぐに捕虜とした。彼らは、勝利した我々の軍隊の接近に警戒しており、森にひっそり行き、鳥でさえ近づき難い高い山に潜伏していた。それから、彼らを母国（混乱した故郷）から連れ出し、彼らにイスラーム教への敬意を起こさせ、そして Ahmedy 教団に入団させた。」

1788 年、Tippu は、ヒンドゥー教徒をイスラーム教徒へ改宗する行程を開始するために Calicut の統治者である Sher Khan に命じ、そしてその年の 7 月に 200 人のバラモンたちが強制的に改宗させ

られ、牛肉を食べさせられた。Mohibbul Hasan、Prof. Sheikh Ali、そして他の歴史学者たちは、強制退去の規模、そして特にコダグでの強制改宗について大きな疑問を投げかけており、Hasan は、出来事について〔記した〕イギリス版は、Tippu Sultan を注することを強調し、彼に対するプロパガンダとして使われていると述べる。Kirmani の *Nishn-e Haidari* では、スルターンをイスラームの勝者として表現する彼らの熱望のために、彼らは事実を誇張しねじ曲げる傾向にあり、そのようなイスラーム教徒の記述に、ほとんど信用を置くことはできないと彼は論じている。例えば、Kirmani は 7 万人のコダグの人々が改宗させられたと主張しているが、40 年後にコダグの全人口がその数よりも少なかったのである。Ramchandra Rao の *Prunganuri* に従えば、改宗者の正確な人数は、約 500 人である。

Tippu が 1790 年 1 月 19 日に、Bekal の統治者 Budruz Zuman Khan に送った手紙には次のように書かれている。

私が最近、Malabar で偉大な勝利をおさめたことと、4 lakh (40 万) 以上のヒンドゥー教徒たちがイスラーム教に改宗したのを知らないのか。私は間もなく、あの忌々しい Raman Nair (Travancore の王) への進撃を決心する。私は、彼が改宗しイスラームを崇拝するという行く末がうれしくてたまらない。私は Srirangapatana に帰還する考えを喜んで捨てる。

以下は、Seringapatam で見つかった碑文を訳したもので、碑文は砦の目立つ場所に置かれていた。

全能の神よ。異教徒の体すべてを排除せよ。彼らの種族を追い散らし、彼らの足をよるめかせよ。彼らの宗教会議を打ち負かせ、彼らの国家を変えろ、彼らの故郷を破壊しろ。彼らの近くに死をもたらせ、彼らから暮らしの手段を切り離せ。彼らの一日を短くしろ。彼らの身体が心配の対象となれ (すなわち、彼らに病がはびこれ)、彼らの視界を奪い取れ、彼らの顔を黒くしろ。

彼はまた、Sringeri の Shankaracharya と文通し、(Pindari と呼ばれる) マラータ族の盗賊騎手たち—彼らは多くの者を殺し、その重要な領地にある寺院を略奪した—による襲撃への悲しみと憤りを表して、(スルターン下で贈られたということを示す碑文の入った金銀の器を持つ) Melkote 寺院を後援し、そのために、そこではシュリーヴァイシュナヴァ派 (ヒンドゥー教宗派) の呪文が伝統的な形式で唱えられなければならないというカンナダの命令が発せられた。

Tipu Sultan はまた、Kalale の Lakshmikanta 寺院に 4 つの銀の杯を贈り、Seringapatam の Ranganatha 寺院に 7 つの銀の杯と銀の樟腦の香炉を贈ったようである。何人かの歴史学者は、これらの行動は第 3 次マイソール戦争の後に起こり、そこでは、彼は降伏の条件に関して交渉しなければならなかったと主張している。彼らは、これらの行動は、ティプーのヒンドゥー教徒国民の支持を得るための政治的な要求によって促されたと主張している。

歴史学者の Hayavadana. C. Rao は、彼の百科事典的な著書 *History of Mysore* の中で Tippu について記した。彼は断言することは、Tippu の「宗教の名における宗教的な狂信と過度な専心は、マイソールと領地の両方において、永久に非難され続ける。実に、彼の偏執さは、あらゆる寛容さの考えを妨げるほど顕著であった」という。さらに彼は、ヒンドゥー教徒への建設的な Tippu の行為は、真の寛容さを示すというよりは、主として政治的でこれ見よがしな行為であったと断言している。

カシュミール

カシュミールにおける少数派ヒンドゥー教徒もまた、イスラーム教徒の支配者によって歴史上迫害されてきた。ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒が、ある期間、協調して生活していた時、カシュ

ミールのイスラーム教徒支配者の何人かは、他の宗教に対して寛容でなかった。カシュミールのスルターン Sikandar Butshikan (1389-1413 年) は、しばしばこれら (他の宗教) を最も劣ったものとみなしていた。歴史家たちは、彼の数々の残虐行為について記録してきた。*Tarikh-i-Firishta* は、Sikandar がヒンドゥー教徒を虐げて、カシュミールでイスラーム教徒以外の居住を禁止する命令を発したと記している。彼はまた、すべての「金銀の像」を破壊するよう命じた。さらに、*Tarikh-i-Firishta* は次のように示している。「多くのバラモンたちは、彼らの宗教や国を捨てるより、毒で自害した。いくらかの者たちが故郷から移住し、少数の者たちはイスラーム教徒になることによって追放の悪魔から逃れた。バラモンたちが移住した後、Sikandar はカシュミールのすべての寺院を破壊するよう命じた。カシュミールですべての像を破壊したために、〔Sikandar は〕「偶像破壊者」と称された」。

私見的結論で、人間性の究極的な実在と、国と人々の幸福を解釈しようと試みる。信仰は良いが、同時に我々は兄弟 (他の宗教) の長所も保有しなければならない。このことが、平和と調和を導くのである。

今日、インドではこの風潮を必要としている。私は、宗教には良さがあり、それは平和を説くが、我々の理解は異なっているという点に立ちたいと思う。今、我々インド人は、同じであり、人として生きているとはっきり自覚する必要がある。平和は伝統より重要である。インドは平和を必要としている。私は、すぐに紛争が解決し、平和と調和が育まれることを望む。